

# 最北の地、国境のまちの歴史保存に尽力する

稚内市 稚内市歴史・まち研究会

稚内市は古くから日本最北の地、同時に国境のまちでもある。それだけに他の地域にはない特異な歴史的建造物や物語、エピソードが数多く残されている。しかし長い歴史の中で朽ち果てたり、散逸してしまったものも少なくない。これを食い止め、保存記録し、先人の思いと共に後世に伝え、まちづくりにも役立てようと、市と協働で保存と研究にまい進するのが「稚内市歴史・まち研究会」。発足以来、新たな発見、肉付けされた史実やエピソードも多く、それらを立体的な観光資源に結びつけるなど、その行動と実績は“現代の北の防人<sup>さきもり</sup>”と高い評価を受けている。

会の発足は2006年（平成18年）。前稚内市長で現稚内ユネスコ協会長の横田耕一さんが市長時代、稚内にゆかりの歴史的建造物や物語が消えてゆくのを見かね、市民有志にその保存の協力を呼びかけたのがきっかけ。

これに応えたのが会長の富田伸司さん（59）。建築会社の社長という職業柄、古い建物の保守や営繕に携わっているうち横田さんの考えに同調、仲間数人と語らって旗揚げした。その重要性が理解されるにつれ会員は次第に増え、現在は正会員30人、協力者は500人にも。

会が最初に取り組んだのは太平洋戦争後の1955～1975年（昭和30～50年代）、稚内底曳漁業の親方で、稚内経済界を牽引した瀬戸常蔵氏の、市街地にある邸宅の復元。無人で荒れ果てていたのを会員有志で庭園や周辺を整備し、建物の内外を補修して漁家の親方の家らしい見事な豪邸に蘇らせた。今では国の有形文化財に登録され、年間1万2千

人ほどが訪れて、稚内観光の重要な一翼を担っている。

## ■ 湾岸に点在する史跡群を検証、記録

次に手掛けたのは西のノシャップ岬から東の宗谷岬に至る約30km間の、宗谷湾岸沿いに残された数々の歴史的遺産の掌握。このエリアは宗谷海峡を挟んでわずか43kmでロシアと国境を接していることから、江戸時代から今日まで国境の警備の最前線であると同時に、樺太（現サハリン）との交流、交易の拠点として位置づけられ、それを物語る遺跡や建造物が点在している。

まず宗谷公園の西端沿いに江戸時代の1800年代、北方警備のために派遣され、寒さと栄養不良のため命を落とした会津、津軽藩士らの墓や碑、陣屋跡などが残され、厳しかった往事の勤務を偲ばせる。

そこから少し下がった海岸線には、同時代2度にわたって樺太に渡り、そこが島であることを発見した探検家・間宮林蔵の「渡樺の出港の地」の碑がぼつんと1基。碑前に立つと眼前に樺太の地が迫り、真理を求めて船出した先人の熱い想いが伝わってくる。

日本最北端の宗谷岬はここから東へ3km。突端にはテレビなどでお馴染みの「日本最北端の地」と標された三角柱と、樺太を見つめて凧と立つ間宮林蔵の立像があるが、これは近年、観光目的で建てられたもの。歴史的建造物はその背後の高台・宗谷岬公園にある旧海軍の望楼や、ラ・ペルーズの探検渡航記念碑など。

望楼は1902年(明治35年)、当時世界最強といわれたロシア・バルチック艦隊の監視のため建てられた。三方に窓が開け、365日、艦隊の動向を見張り、日露戦争の日本海海戦時、数々の情報をキャッチして勝利に寄与したといわれている。

ラ・ペルーズはフランスの軍人で、1787年ヨーロッパ人として初めて帆船で太平洋方面を探検して宗谷海峡を発見。以来ヨーロッパではここを「ラ・ペルーズ海峡」と呼んでいたという。このことは長く我が国では知られていなかったが、発見してから220年目の2007年、子孫が稚内を訪れて初めてわかり、研究会の富田会長らがフランスに渡ってこれを確認。同年、海峡を見下ろす今の場所に、2枚の石版を立てて帆船に見立て日仏の実行委員会の手で建立された。

このほかこの台地公園には1983年(昭和58年)、大韓航空機がサハリン西海岸沖で、当時のソ連機に撃墜され268人が犠牲となった事件を悼んで建てられた祈りの塔や平和の碑、世界平和の鐘など、平和を願うモニュメント類が立ち並んでいる。

### ■ 歴史と景観をマッチさせたフットパス創設

この高台と地続きで背後に広大に広がるのは、うねる稜線と切り込んだ谷が入り組んだ国内では珍しい周氷河地形の宗谷丘陵。3度の山火事で森林がなくなり今は緑一面の牧場に変身し、北海道遺産にも指定されている。研究会はここに着目。市や関係団体とタイアップして岬公園からこの丘をぐるり半周して海岸線に至る、歴史遺産と自然景観を組み合わせたフットパスを創設した。この運動を推進するシーニックバイウェイ北海道は、このコースを「宗

谷ヒストリーロード」と名付けて、一般に推奨。令和元年秋には「全道フットパスの集い」の会場となり、約100人の愛好者がコースの終盤2kmほどに敷きつめられたホタテ貝の白い貝殻道路など踏みしめて歩く楽しさを満喫した。

### ■ 樺太南半分が日本領に、北の玄関口に躍り出

歴史は流れ1905年(明治38年)、日露戦争が終結し、ポーツマス条約で北緯50度以南の樺太が日本領土となり、稚内は日本最北の地から一躍北の玄関口へ躍り出た。樺太との人、物の流れが活発となり、1923年(大正12年)には稚内一樺太・大泊間に稚泊連絡船が就航し、当時の国鉄も稚内まで延びた。

これを象徴するのが市中心部にある稚内港の北防波堤ドーム。稚内は年中強い風が吹き、連絡船の利用客は岸壁から船に乗降する際、常に強くて冷たい波浪に悩まされ、時に高波に飲まれて死亡するケースも頻発していた。そこで稚内築港事務所は岸壁に庇付きの防波堤を作ることを思いつき、赴任間もない北大出身の若い職員・土屋実氏(当時26歳)に設計、施行を委ねた。試行錯誤を重ねた末、できあがったのがギリシャ・パルテノン神殿を思わせる現在のアーチ型ドームだ。高さ14m、長さ427m、70本の柱で構成される。5年かけて1936年(昭和11年)完成し、以来多くの往来者を風雪と波浪から守り、今日も健在で、稚内の観光のスポットになっている。

樺太の南半分の日本統治は1945年夏の太平洋戦争終結まで40年間続き、その後はロシア領に。この間同港を通じて約42万人の邦人が渡樺。樺太

の木材や海産物、石炭などが移入されている。その間に刻まれた同地での人々の暮らしや出来事は、日露国境の標石などと共に市街地にある樺太記念館に保存され、樺太の往事の様子を今に伝えている。



樺太渡航の人々を風雪、波浪から守った稚内港北防波堤ドーム

### ■ 終戦からの歴史凝縮、稚内公園

防波堤ドームや樺太記念館の向かい側、市街地を挟んだ高台は稚内公園。ここには開基百年記念塔を頂点に、主として太平洋戦争後の稚内の歴史が、つづら折れの周遊道沿いに碑などの形で凝縮している。終戦直後の樺太でソ連軍の侵攻中、電話交換の仕事で最後までやり、自ら命を絶った真岡郵便局の9人の若い女性交換手を悼む「9人の乙女の碑」、終戦のどさくさや引き揚げ時の混乱で命を落とした人々を慰める「氷雪の門」、南極で活躍した樺太犬を称える「犬の像」など……。研究会はこの周辺もフットパスとし、市民らに親しんでもらっている。

これらの建造物や史跡の維持管理は、直接的には市が行っているが、手が回らないところは研究会が状況に応じて小修理したり、周辺の草刈りをしたりしてサポート。調査研究、記録した資料はすべて市に報告され、広報パンフレットや観光案内のデータ

として活用されている。また市が市民を対象に行っている「稚内学講座」にも「宗谷<sup>さきもり</sup>防人物語」といったテーマで講座を分担。それを広報紙で伝えるなど、一人でも多くの市民に稚内市の歴史を知ってもらおうという努力を続けている。ここ1、2年は蓄積した資料を基に観光協会と協力し、史跡を訪ねる「歴史巡りツアー」も展開し、好評を博している。

### ■ 赤レンガ通信所修復に全力投球

会が現在最も力を入れているのは、旧海軍が北方海域の電波戦に対応するため1931年(昭和6年)と41年(同16年)に旧幕別(現恵北)に建てた大湊通信隊幕別送信所(通称赤レンガ送信所)の修復作業。ちなみにここは、太平洋戦争開戦時の昭和16年12月、択捉島<sup>ひとかつぶ</sup>単冠湾に集結していた日本海軍連合艦隊に、真珠湾への出撃を命ずる「ニイタカヤマノボレ1208」の暗号電報を中継発信した施設といわれ、赤レンガの建物としても稚内では最古とされている。

戦後はアメリカ軍の通信施設や通信省の無線局などに使われていたが、老朽化が進んだためお役ご免となり2006年(平成18年)、市に引き取られた。といっても長い年月で大半の建物は崩壊し、市が手に入れた時は大、中、小3つの送信棟が残っただけ。それも周辺は草ぼうぼう、赤レンガはシミが浮き出、屋根はかろうじて形を残す程度とほとんど“廃屋”状態。しかし市はこれをかけがえのない戦争遺産として評価し、翌2007年(同19年)、保存を前提に研究会に無償で管理を委託した。

会は直ちに周辺の草を刈り、桜の植樹を行う一方、熊田要二副会長(59)を実践隊長として、比較的

保存状態の良かった最小棟 64 m<sup>2</sup>の修復に着手。会員はもとより大工、板金などの専門の技術を持った協力員も多数駆けつけ、木材、鋼材などの資材もみんなまで持ち寄り、数年がかりで見事に復元させた。また、室内には、これも歴史遺産とされる、アイヌの鍛冶職が江戸時代に作った国内初の英国軍艦仕様の室内ストーブ（カッヘル）も据え付けた。今ここは会員の勉強会場として使われているほか、市民や観光客へのレクチャー教室として利用されている。



崩れ落ちた屋根、望楼の修復が続く赤レンガ通信所中棟

この間にも残る 2 棟は老化が進み、共に屋根が崩落。中でもメインの望楼付き中型棟は、赤レンガの一部もろとも大きく崩れ、無残な姿に。2 棟は建物も大きく、修繕費の捻出に頭を悩ませていたところ、幸い、道内の民間財団から助成金が出ることになり作業は再開。令和元年冬までに中央部の屋根が望楼ごと再建され、現在は赤レンガ壁の積み上げが行われている段階。この後はクラウドファンディングなどで資金を募り、何とか全面修復にこぎ着けたい、と張り切っている。

ところでこれまでの調査研究や保存にかかった経費は、どこからの援助もなく、すべて会員の年 5

千円の会費と無償の労力でまかなってきた。富田会長は「皆さん、全くのボランティアで頭が下がります」と苦笑い。しかしこうした地道な取り組みが、毎年百万人を超す観光客を呼ぶ原動力となっていることは間違いなく、2017 年（平成 29 年）には国交省大臣の「手づくり郷土賞」受賞に結びつき、これが会員の誇りとも活力ともなっている。

富田会長は「会員と協力者みんなの力でここまで来た。地域のために少しでもお役に立っているならこんな嬉しいことはない。これからも続けますよ」と謙虚に語り、さらに「それにしても、私を含め地元の人々はまちの歴史を知らなすぎる。本州の古都の人たちは、古戦場や寺院など自分たちのまわりの歴史を子どもの頃から知らず知らずに学んでいる。だが北海道にはそれがない。それぞれの地域で、その土地の来し方を学ぶ機会が是非あってほしいものだ。それがまちづくりに繋がるのだから」と結んだ。

#### ■ 連絡先

〒097-0001

稚内市末広 5 丁目 5 番 6 号

稚内市歴史・まち研究会

会長 富田 伸司（とみた しんじ）

副会長（連絡先）

熊田 要二（くまだ ようじ）

TEL/FAX : 0162-26-2386（熊田）

携帯 : 080-6098-2386

Email : stomita@tomitagumi.co.jp